



135号

2008/7/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

四川大地震・犠牲者の方々を哀悼し、四川の復興を願っています



ネパール・グルワマイ村(現在図書館を建設中)の子供たち 2005年11月 加藤誠一(ネパール・ミカの会)

‘わんりい’135号の主な目次

北京雑感その(26)「北京の病院事情」.....	2
私の調べた四字熟語(24)「百発百中」.....	3
すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮(4).....	4
内モンゴル・草原の広がり①.....	6
媛媛講故事(5)「後羿射日」(後羿、太陽を射る).....	8
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より.....	8
チベット旅行記「チベット仏教と天空列車」II.....	9
アフリカとの出会い(26).....	10
モンゴルの草原に植えた樹は?.....	10
スリランカ紹介(20)「両替屋」.....	11
四川大地震体験記.....	12
私の四川省一人旅(番外編)汶川・百花でII.....	14
大連だより・日本語教師雑記(8).....	16
中国を読む(53)「憲法なんて知らないよという」.....	17
‘わんりい’掲示板.....	18

♪♪「中国語で歌おう!会」・7月の歌 ♪♪

「赤とんぼ」(歌詞 P3)

(久しぶりに日本の歌を中国語で歌います)



於：まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

7月11日(金) 19:00~20:30

指導：趙鳳英^{zhào fèng yīng} (中国人歌手)

▲ご参加の方は録音機をお持ち下さい

●「中国で歌おう!会」 於：まちだ中央公民館
毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)
19:00~20:30 会費(月1回):1,500円

▲体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。





四川大地震は、未曾有の地震災害といわれ、特に小中学生の犠牲者が多いのは痛ましいことです。さらに多くの人々が負傷して、医療支援を待っている様子がテレビでも報道されました。中国全土から医師や看護師が集結し、日本からも医療チームが救急援助に出かけて行きました。

そんな中で、中国の都市における医療事情がテレビで取り上げられ、中国の医療制度の問題点を解説していました。地方からより良い医療を求めて大都会へやって来る人達が金銭的にも、労力的にも大変な思いをしているようです。地方の方々の苦労とは比べものにならないでしょうが、北京の老百姓（一般市民）の病院事情をちょっとご紹介してみます。

ある時、知人の具合が急に悪くなったことがありました。午前中、スーパーマーケット家楽福（カルフル）へ買い物に出かけて、お昼寝をした後、起きようとしたら眩暈が酷くて立てなくなってしまったのでした。急遽大学構内にある病院に行きました。午後のことで、急患扱いで診察を受けることができました。検査しても原因は分からず、とりあえず点滴をして様子を見ることにしました。

院内の薬局で点滴薬を買って来て、それを看護師さんに渡します。点滴の部屋は、安楽椅子が並んでいて、大勢の人が椅子に座って点滴を受けていました。知人は、立つと眩暈がするというので、ストレッチャーと言うのでしょうか、車輪付のベッドで部屋に入って処置を受けました。部屋はあまり広くないので、途端に狭苦しく感じるようになりましたが、それぞれおしゃべりを楽しんでいて、日本の病院にはないような雰囲気でした。知人は、点滴を受けても眩暈が治らなかったので、そのまま入院しました。

知人は、各種検査を受けたのですが、検査結果には異常が見られないのに症状は改善せず、それでも一応点滴は続けていました。ある日の午後、ちっとも良くならないので業を煮やして、大学病院に病室を確保したまま、地域の中心的病院へ診てもらいに出かけました。中国では、過去に受けた検査結果や写真フィルムなど、皆個人が持っていて、違う病院へ行く時には一式持って行きます。

今回も急患として受付の窓口に行ったので、すぐ受け付けてもらえましたが、混んでいて、1時間近く待たされました。入り口で車椅子を借りようと思ったのですが、全部出払っていて、これを使っても良いと言われたのが車輪付のベッドでした。使用料は無料ですが、保証金と

して200元払われました。勿論返却すれば全額戻って来ますが、車椅子ならともかく、ベッドなど持って行き様が無いと思いましたが、決まりだからと言われました。医師が、問診と検査資料を見ながらCTを撮って見たらと言うので、また会計課の窓口で費用を支払い、領収書を持ってCTを撮りに行きました。費用は大体300元位だったと思います。

CTの結果はすぐ医師の所へ回って、その結果を見ながら、「特に眩暈を引き起こすような異常は見つからない。もう少し様子を見るように」と言われたので、そのまま大学病院の病室に帰りました。私は、日本の医療に関する知識が乏しいのですが、常識的に考えて、日本ではこのようなことは有り得ないと思います。中国でも特殊なケースかも知れませんが、可能だと言うだけでも驚きです。

今回は2度とも急患として受診したので並びませんが、普通に見て頂く時は、朝早く申し込みの順番を取るために並びます。病院の診察開始は9時からですが、受付は8時から8時半に始まります。その順番を取るために、6時前から並びます。受付窓口の近くには、診察を担当する医師の名前と顔写真、肩書きと一緒に診察料が明記されています。著名な先生は60元、教授は40元、助教授は20元、講師は10元、一般医局員は5元といった具合に値段が付いていて、診察を申し込む時、「何元の誰先生」と言って申し込みます。人気のある先生に申し込む時は、行列の前のほうにいても、その時までにはその日の診察人数に達してしまい、受け付けて貰えないときもあります。

首尾よく受け付けて貰えて待合室で待っていると、やがて診察開始時間が近くなって、看護師さんが案内を始めた時、友人の付き添いで行った私はビックリしました。案内は、「何元の〇〇先生（受診希望者）はこちら」、「何元の△△先生はこちら」と、先生の名前の前に、必ず金額を付けるのです。経験に応じて診察料が異なるのは合理的ですが、案内にまで金額を言われると、慣れていない私には、とても奇異に感じました。

私が、見学した病院は5箇所ほど（ほとんどが、大規模で近代的な病院）でしたが、どこでも診察器具はみな最新式のものを使っていました。しかし、診察室の配置とか、患者さんの流れとかには、まだまだ改善の余地があるようです。1箇所だけ、北京大学付属病院歯科診療室は、ゆったりとして機能的でした。外国人用とは言え、患者さんの殆どは中国人でした。テレビで紹介していた、高級志向の病院はこんなのでしょうか、老百姓には縁の無い病院です。

私たちは、的を狙う競技を観戦しているときに、狙った的に必ず当たる様子を見て「あの選手は凄い! 百発百中だ」と言ったり、またある人が何かの予測をたてて、それが皆的中した場合にも「すごいなあ、彼の予測的中率は百発百中じゃないか」などと“百発百中”を用います。

百発百中、辞書にはどう載っているでしょう。

現代国語(三省堂)は、「百発百中: ①発射すれば必ず命中すること。②予想が全て当たること。」

中日辞典(小学館)は、「百发百中 1、〈成語〉百発百中 2、〈比喻〉(仕事・計画などが)確実で、必ず実現するたとえ。」とありました。

この成語の出自は「戦国策・西周策」の“楚有養由基者善射去柳叶者百步面射之百发百中”(楚の国に養由基という弓の名人が居て、柳の葉から百歩はなれてこれを射、百発百中であった。)の部分です。

戦国の時期に秦国の大將・白起は兵を率いて韓、趙等の国を打ち負かし、更に魏国の首都の大梁を攻撃する準備を始めました。大梁がひとたび秦に攻められてしまうと、大梁に近い西周は非常に危険になりそうな状況でした。この時策士の蘇励が周王に次のように言上しました。

「陛下は白起の攻撃を阻止する対策を講じるべきです。そうしないとこの先どうなるか予測出来ません」

そこで周王は白起の攻撃を阻止する対策として策士の蘇励を秦国に派遣することにしました。

秦国に到着した蘇励は白起に次のような話しをしました。

「昔、楚の国に養由基という名の弓の名人が居りました。彼はいつでも遠くから柳の葉の中心を百発百中で射ることができました。それを見た周囲の人は口を極めて彼をほめたたえました。ところがちょうど通りかかった一人の人が“私なら彼に矢の射方を教えられる。”と言いました。養由基はこれ聞いて心中おだやかではありません。

そこで、“他の人は皆、私の矢の射方は大変上手いと言っているのに、あなたは私に、矢の射方を教えられると言っている。なんならあなたがここへ出てきて試しにやってみますか?”と言うと、その人は「私はあなたに矢を射る技量は教えられません。でも考えてもみて下さい、あなたのように柳の葉の百発百中を続けていたら、休む

ことも出来ません。ひとたび疲れて、一発でも当たらない矢があったら、あなたのこれまでの百発百中の成果(記録・名声)が無駄になってしましましょう」と言いました。

物語を話終わって蘇励は更に「白起さま、あなたは韓、趙等の国を打ち負かしました。そして今また周国に近い魏の大梁を攻撃しようとしています。しかし、もしこの戦に失敗したら、今まで常勝し続けた努力が無駄になってしまい、名声を傷つけることにもなります。ここはご自身が病気になることにして、是非出兵をお止めになった方がよろしいと思います」と言いました。

これを聞いた白起は、自分の百戦百勝の名声を守るために、軽々しくは出兵しまいと考え、体が不調だという口実で、魏の国を攻めることを止めたのでした。

hóng qīngtíng

红蜻蜓

作詞: 三木露風

作曲: 山田耕作



fēihóng cǎixiá bànbiāntiān
绯红彩霞半边天

hóng qīngtíngjìng yán
红蜻蜓竞妍



nǚ bèi zhe tiānzhēn dì tiào wàng
妮背着天真地眺望

nà gāi shì nǎ nián
那该是哪年

xǐ xiào shāngǎng sāng tiánjiān
嘻笑山岗桑田间

kuàilè sì shénxiān
快乐似神仙

sāng guǒ zhāi mǎn le xiǎo tí lán
桑果摘满了小提篮

qǐ néng shì mèng huàn
岂能是梦幻

bǎo mǔ shēnshì běn bēichuàng
保姆身世本悲怆

shí wǔ jià tā xiāng
十五嫁她乡

chūn gēng xià yún yīn xìn zǎo jué
春耕夏耘音信早绝

yuàn xìng fú wú yì
愿幸福无恙

fēihóng cǎixiá bànbiāntiān
绯红彩霞半边天

hóng qīngtíngjìng yán
红蜻蜓竞妍

xiāoyáo zìzài wǔ bā
逍遥自在舞罢

rēng tíng zhú gān jiān
仍停竹竿尖

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 李晴 訳

第4回 心の声にしたがって

高鳳蓮さんの初期の作品は、1980年代の中期から1990年代の初期に創作された作品をさします。この頃の作品は基本的には、題材の写実だったり形を誇張したもので、心の赴くまま自在に剪った素朴な内容ながら味わい深く人間味が溢れています。

陝北の農村では剪纸を窓花と呼び、一般的には草花や家畜、小動物などを剪って家に飾り付け、単調な窯洞の戸口や窓を明るくし、単一な黄土高原の風景に華やかな色どりを添えます。他には衣服や靴に施す刺繍の型紙として使い、またあるいは宗教や祭祀にかかわるものとして、人々の暮らしや社会への期待と憧れなどを窓花に託します。当時の剪纸のなかで、ちょっと複雑なものとしては、誰かの子供が病気になると剪る抓髻娃娃(頭に髷を結び、両手に鶏を持った子供の姿をした神様)がありました。病気や災いを去らせる目的に使われたのです。普遍的なものとしては、生年の干支の剪纸がとても人気があります。干支は必ず誰かが持っているので、毎年吉祥の気持ちを含めて贈るととても喜ばれるのです。

1984年の末、突然、高鳳蓮さんの身に災難が降りかかりました。二番目の娘が出産時の大出血で亡くなったのです。自宅での出産で、誰もがこのような大事態にどのように対処してよいのかわからず、ただ慌てふためくばかりでした。まだ20歳の若さでした。

高鳳蓮さんが知らせを聞いて駆けつけたときにはすでに遅く、死に目に会うことは出来ませんでした。これまでの苦労の年月はなんとか乗り越えてくる事が出来ましたが、この次女の死だけはどうしても受け止める事が出来ませんでした。その後、2年もの間、高鳳蓮さんは人が変わったようになり、殆ど人と話を交わすこともなくなり、用事の無いときはただ静かに座り、自分がもっと早くに着いていたら娘を助けられたのにとひたすら自分を責めるばかりでした。

人の世の最大の苦しみは親が子をあの世へと送ることです。このとき以来、高鳳蓮さんは生活への関心が薄くなり、生きることに意味がないという暗い気持ちにいつまでも覆われてしまいました。

1986年、県の文化館が剪纸の学習班を立ち上げました。子供たちに勧められ、気分を晴らすために学習班に参加をするようになりました。学習班では、たくさんの虎の剪纸を作りました。その年はちょうど寅年だったのです。他の多くのものとは違った一幅の剪纸がありました。それは四角い図形のなかに4本の蹄で飛ぶように走る虎でした。虎の上には人が乗っています。よく見るとそれは長い髪をお下げにした女性です。虎のお腹の下には白い雲のような一輪の蓮の花が漂っています。

(左図)

高鳳蓮さんが深い思いの中で説明してくれたところによると、これは次女のことを考えながら剪ったものだということです。高さんは毎日、若くして亡くなった娘が飛虎に乗って天国へ行き、やがて自分と会える日を極楽で待っていてくれることを心の底から祈っているのだそうです。一幅のごく普通の剪纸が高鳳蓮さんによって濃い人情の彩りを与えられ、聞く人を感動させてやみません。

高鳳蓮さんの剪纸は、現実の生活体験や心の中のさまざまな想念

などを、比喩や象徴を用いて剪り出したもので、その中には先祖から受け継がれて来た風俗や知識が織り込まれています。

このような形式は陝北の黄河流域の地区ではごく普遍的なものです。その頃、高鳳蓮さんは基本的には干支を主な題材とし、干支の動物を剪っていました。彼女は実際の形にこだわって剪ってはいませんが、その本質を良く掴み、表情を上手く捉えています。例えば、馬年には馬を剪りますが、とても生き生きと、飛び跳ねる四肢は伸び広がり、大きく飛び上がり、威风凛凛とし、元気に満ち溢



娃娃騎虎



元ついた馬

れています。

1992年は申年で、高鳳蓮さんは人間味のある猿の剪紙をたくさん作りました。もともとは人間と猿とは近く、孫悟空の擬人化した形は誰もが良く知っているものです。孫悟空の物語もまた剪紙の題材としてよく使われます。また高鳳蓮さんの剪る鶏は決して単純に鶏の形を剪ったものではありません。その姿は見る人に誇り高い鳳と吉祥を表す凰とを思い起こさせます。軽やかな羽毛は四角い画面いっぱいに入れられ、疎ではあるけれど空ではなく、虚と実が互いに引き立てあっています。剪紙の寸法も程よく、貼って飾りにするにも、身につけて持ち歩くにも丁度いい大きさです。

当時、私が編集していた《陝北四婆姨剪紙》の中で、高鳳蓮さんの剪紙の形について次のように書きました。

『高鳳蓮は実に名に背かず、そのスタイルは独自の旗印を掲げている。内容的には伝統的な剪紙であるが、その表現手法は全く別のものである。そこには、新、奇、怪、絶の四つの要素が全て揃っている。

高鳳蓮さんの作品を見ると、誰でも興奮を覚え、新鮮さ、奇妙きてれつさ、絶妙さの感じを覚えると同時にさまざまな味わいも尽きない感じがします。

高鳳蓮さんは祭祀にかんする剪紙を作ることにはとても慎重です。普段の日に軽々しく剪ることはしませんので、作り置くなどということも勿論ありません。一般的には求めに応じてその場で剪ります。例えば隣近所の誰かが、子供が病気になったり、祖先をお祭りするときややって来て頼むと、高鳳蓮さんはそこでやっとなら剪るのです。「なんでもない時に剪ると、効き目がなくなるんだよ。」と真剣に言い、その理由はあちこちに飾り物として貼るこ

表 表現手法四つの要素

新	多くの剪紙は四角であり、その図案は蜜といえは風を通さず、祖といえは、馬も走りぬける。居と実が互いに引き立てあい、互いに補い合っている。
奇	一切下絵を描かず、細かい部分も缺で切り、鳳の髻、鶴の羽、龍の鱗、獅子の毛、どれも軽々と缺で剪り出す。
怪	造型は全て動物、家禽で表され、人物も猿の顔である。仙人から貰った長寿の桃を食べる猿によって、人間の祖先を遡りながら吉祥の雰囲気を図る。
絶	作品の多くは二つの四角がつながっているものである。広げると目が眩むほどである。一幅、一幅はまるで石刻の壁画のようであり、それぞれの造型は青銅器に見られる伝説上の怪獣や戦の神の形から変じたものと思われる。』

とは神様や祖先を敬わないことになり、威力がなくなるということです。私は何度か高鳳蓮さんにこの種の剪紙を剪ってくれるように頼みましたが、このような理由からその度に断られました。

高鳳蓮さんは人の顔を剪ることはありません。しかし、ある年の夏、私は一人の日本人の学者を高鳳蓮さんのところへ案内したことがありました。この先生は中国の甲骨文に造詣があり、思いがけないことに高鳳蓮さんの剪紙の模様を曲がりくねった線の中に甲骨文の影を見出したのです。

先生は自分の発見を身振りを交えて話しましたが、私はうまく高鳳蓮さんに説明することが出来ませんでした。高鳳蓮さんはこの日本人はなかなか面白いと思ったのか、たくさんのお世辞を言ってくれたと思ったのか、やおら鋏を取り、先生に梅の花のような目をし、ニンニクのような鼻を持ち、三日月形に口を広げ、山羊ひげをつけた肖像を剪ってあげました。先生は半日もしげしげと眺め、感慨深げにいいました。

「黄土高原の人の目には私はこんな風に見えるのかね」

そして大事そうに自分のノートの中に挟みました。多分高鳳蓮さんはまだ二人目の肖像を剪ってはいません。先生は本当に運が良かったです。

この頃はまだ、高鳳蓮さんの作品と周辺地域の人々の作品の図柄では近似点がかなりありました。しかし、高鳳蓮さんの作品は質朴簡素で心打たれます。



拉手娃娃

「馬頭琴演奏家のチ・ブルグッドさんの山荘に泊まり、2004年に‘わりい’が植樹したモンゴル松の生育状況を見たり、現地のモンゴルの家族と交流したり、草原で乗馬を楽しんだり、大草原を走る鉄道に乗車等を予定しています。チ・ブルグッドさんも同行」というのが内モンゴル旅行の募集案内でした。

私はこの企画に滑り込みで参加し、皆さんと共に過ごしました。その時の見聞記です。拙作行程図を参照してください

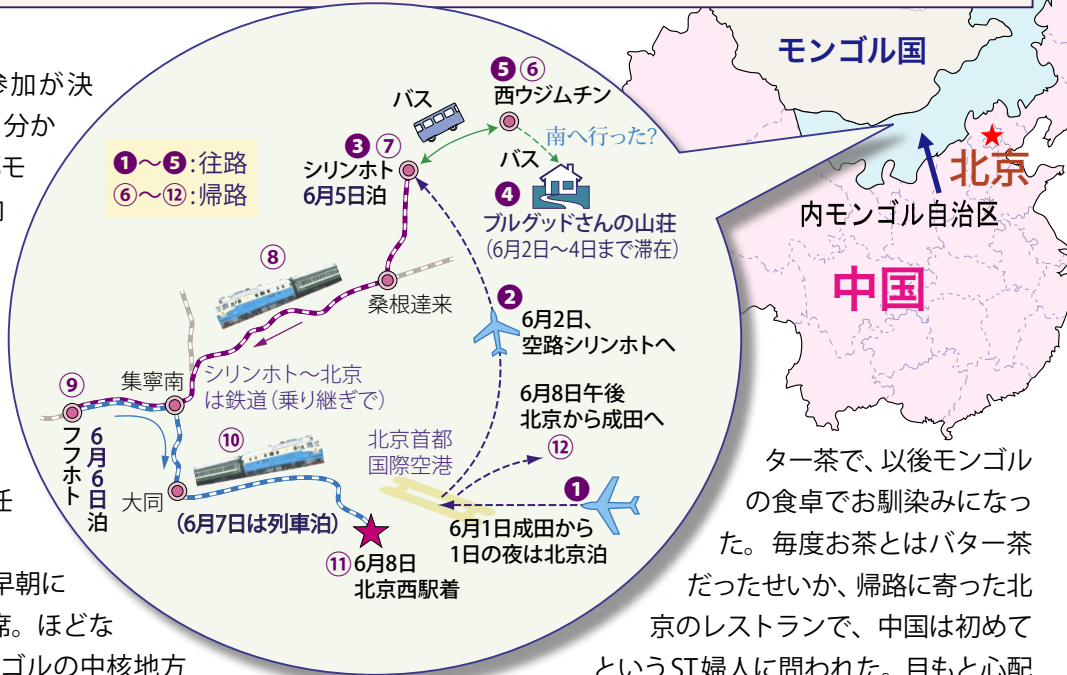
●内モンゴル?

内モンゴルへの旅行へ参加が決まったが、現地のことはよく分からなかった。「朝青龍」の故郷モンゴル国とは違うらしい。「内モンゴル自治区」と「モンゴル国」は同じ民族言語なのだが建国には大国のはざまでの、複雑な歴史があり、かたや独立国、もう一方は中国領自治区に分かれてしまった。これには日本も責任の一端がある。

我々12人を乗せ、北京を早朝に飛び立った飛行機はほぼ満席。ほどなく草原のシリンホト(内モンゴルの中核地方都市)飛行場に着陸。空港建物は「ゲル(遊牧民のテント)」を模して造っており、必要最少限の設備で好ましい。

機内からの荷物を受け取ってバスに乗り、遅い朝食を摂るために移動。飛行場とシリンホトの市街地は隣接しているので、すぐに広い道路の町並みになった。白い建造物が多く太陽が近い(気がする)のでまぶしい町だ。そして建設中の工事現場が多い。バスから観察すると道路が広すぎて、お年寄りには暮らしにくそうだ。信号のある交差点は遠回りになるので使わないのか、轆けるものなら轆いてみるといった危なげな感じで、道路をわたっている老人を見た。

行き着いたレストランでモンゴル料理初見。テーブルの中央に大きな鍋があり、褐色の温液体で満ちている。これはバ



ター茶で、以後モンゴルの食卓でお馴染みになった。毎度お茶とはバター茶だったせいか、帰路に寄った北京のレストランで、中国は初めてというST婦人に問われた。目もと心配げに「ここでもお茶とは、バター茶ですか?」と。

牛のバターなのでチベット(ヤク)のバター茶より飲みやすい。味は、塩味のミルクティーに近い。ダシに干し肉を入れることもある。好みで、炒った粟を入れふやかして食べる。これは香ばしくておいしい。総体としていえば油っぽい紅茶仕立ての粟粥だ。私は好きになった。

肝心の料理だが、小麦粉を原料としたパン、ナン類の種類が多かった。町のレストランなのでモンゴル族、漢民族双方の食物を提供するのだろう。

●高原の山荘へ

食事を済ませ、10時頃目的の「山荘」に向けバスでひた走る。天気は、やや曇りがちで場所により小雨が降ってい



シリンホト飛行場の建物。「ゲル」を模している。右側が出口、左側に少し見えるのが、到着口である。



西ウジムチンでのモンゴル料理。バター茶が中央を占めている。小麦粉製品、肉料理が主体だ。



四駆車で、落伍者を拾いに行くブルグッドさん(右)と、運転のバインモンド家の青年(左)。落伍者は出なかった。車は中国製でかなりの年季ものだ。



草原の山荘。手前の丸いのは「ゲル」左側にもうひとつ、合計3つあったが、強風で飛んでしまったという。

た。道路はすこし高低やうねりがあるが直線的で変化に乏しい。我々を乗せ疾走するバスが、道路のリボンを手繰っても手繰っても、短い丈の草原と羊の群が続く。草丈が短いのは放牧で食べられてしまうからで、それとまだ芽吹いて間がないためだろう。途中、露天掘りの石炭採掘場あり。

13時頃、西ウジムチン到着。さらにバスは走り続けて、14時過ぎに広い道を捨てて右折し、枝道の未舗装道になった。目的地が近いようだ。

枝道に入るとすぐにその道も外し、ブルグッドさんの指示でバスはいきなり左折して草原の海に進入した。バスの進むところが道というわけだ。草原は雨で少々ぬかっており、タイヤが少しはまった。運転手は草原ドライブは無理と判断し、すぐにバスを止めた。

バスが使えず、どうするのかと案じていると、ブルグッドさんの指示があり、荷物は四駆車が迎えにくるのでこれに乗せ、人間は山荘まで歩くことになった。山荘までは徒歩30分ぐらいとのこと。ブルグッドさんはバスに残り、我々11人は、示された広い谷間の方へ歩き始めた。私は荷物の奥に靴があったが、取り出すのも面倒なので履いているサンダルで歩く。日本だと、こういう高原状の草原は湿気ぬかるみがあり、泥濘で歩きにくいのが通例だ。だがモンゴルのこの

場所は地面がかなり固く、サンダルでもふつうに歩けた。

荷物を運ぶために、ブルグッドさんが携帯で呼んだ四駆車が我々の脇を通り抜けた。

●山荘のあれこれ

山荘は、二つの山の鞍部にあった。といっても日本の鞍部を思い浮かべてはいけない。山も谷も限りなくゆるやかな草原鞍部である。そんな場所に2軒の家があり、その一つがブルグッドさんの白い山荘。もう一軒、煉瓦の塙を巡らせたのがお隣バインモンドさんの家だった。バインモンドさんの家族の人たちに山荘の管理や、我々の食事の世話などをお願いしている。

遠目には小さな山荘と感じたが、中に入れば、部屋が5つもあり、なかなかの規模である。周りの景色が大きいので、家が小さく見えた次第。ブルグッドさんがこの山荘を建てた目的は、馬頭琴の合宿練習をしたり、ゲルでのキャンプなどだそう。

こうして3泊の山荘生活が始まった。オンドル付きの部屋は、先輩方4人に譲り、残りの年少者は2段ベッドの部屋へと男女別に分かれた。山荘ぐらし手始めは我々のために羊の解体。はがねの心臓S女史は、一部始終を見逃すまいと、家の裏へ羊の後を追っていく。なまくら心臓のその他大多数が、修羅場が済んだ頃におそろおそろ解体現場を覗きに。バインモンドさん親族の青年によって、手際よく捌かれた3歳羊が、自分の毛皮を下敷きにして血も出さず腑分けされた。

6月2日の夜は、解体した羊の料理となった。2004年の植林に関係した現地の役人も駆けつけ、山荘は歌声でにぎわった。

6月3日早朝、私は例によって早々と目が覚めた。4時30分、すでに明るい。皆が寝静まっている中そろりと抜け出し外へ出た。山荘の標高は約1500mもあり、寒い。SYさんが外にいて、挨拶。目の前の小山に登るつもりで歩き出したが、振り返ると山荘後方のより大きな山が、黄金色の斜光をあび、静まりかえていた。私は方向を変えその山に向かった。朝食は8:30、それまでに帰れるだろう。(続く)



早朝登山途中から、山なみを見る

後羿¹⁾は堯帝時代²⁾の神で、矢を射れば天下一といわれていました。伝説によると、後羿の妻である嫦娥は、もともとは人間の女姓でした。大変な美人でしたので、河神が気に入り、彼女と結婚したいと思いましたが、嫦娥はどうしても応じませんでした。河神は怒って、怪しい風を起こし、嫦娥の気を失わせてしまいました。河神が昏睡した嫦娥を奪おうとしたところに後羿が現れ、矢を射って河神の目を潰してしまいました。嫦娥は後羿に救われ、そして、二人は愛し合うようになり、夫婦の契りを結びました。



河神は悔しがってなんとか復讐しようと策をめぐらせました。竜宮には、1本の神木があり、その木の上に九羽の金の鳥がいて、まるで竜宮の太陽そのもののように輝いていました。明るく、暖かく、竜宮の至るところを照らしていました。河神はこの九羽の鳥を解き放ち、後羿と嫦娥を焼死させようとした。

九つの太陽が昇りました。本当の太陽を合わせ十の太陽がぎらぎらと人間を激しく照りつけ始めました。夜もなくなりました。河も乾ききり、農作物も育たず、人間も次々に太陽に焼かれて死ぬようになりました。後羿には

これは河神の仕業だと分かっていました。

人間たちの災難は、間もなく天帝の知るところとなり、天下一の弓矢の達人である後羿を人間に遣して、九つの偽の太陽を退治するように命じました。後羿は天帝から一張りの神弓と十本の神矢を貰うと全身の力をこめて偽の太陽を撃ち始めました。

一つ、又一つ、悪魔のような太陽は射落とされてゆき、とうとう、元の一つだけになりました。後羿は輝かしい勝利を収め、人間たちは元のような穏やかな生活に戻ることができました。

天帝はその偉大な功績を称えてさまざまな褒美を後羿に与えました。しかし、これは他の神々の嫉妬を招ねき、無実のことをいろいろと天帝に言い付けました。天帝は終に讒言を信じ、後羿は人間の世界に格下げされることになりました。

後羿はその後、妻の嫦娥と共に人間の世界で狩猟を続けていたといわれています。

注1) 中国の伝説で、9つの太陽を射落とした弓の名人として知られている。

注2) 中国神話時代の五帝と呼ばれているうちの一人。舜と並んで中国の理想的帝王とされている。

yú qíng cán xīn
松本杏花さんの俳句「余情残心」より

外灘のネオンにまみれ汗の玉

wàitān bù yè chéng
外滩不夜城

húnshēn mù rǎn níhóngdēng
浑身沐染霓虹灯

lì lì hàn zhū yíng
粒粒汗珠莹

季语: 汗珠 夏

赏析: 此首及以下作品为作者2006年6月21日至27日来华“周游江南”是创作。

上海外滩的夜景闻名遐迩, 霓虹灯五彩缤纷, 观光客熙熙攘攘, 灯火通明, 热闹非凡。作者身披霓虹灯的灼灼彩光, 浑身已泌出汗珠。既然一滴水能反映出太阳的光芒, 估计这汗珠也是色彩斑斓的吧!

夏の宵ジャズの漏れだす遊覧船

xià lái xiāoyè duǎn
夏来宵夜短

juéshì yīnyuè xiè jiāng pàn
爵士音乐泄江畔

nà liáng yóulǎnchuán
纳凉游览船

赏析: 外滩边的和平饭店等均设有夜总会, 再加上游船上的歌舞厅, 流传出来的爵士乐此起彼伏。

满目流光溢彩, 充耳世界名曲, 慢步外滩, 乘船纳凉, 不知不觉就到了半夜。本来夏季黑夜就短, 更何况在不夜城消遣!

天空列車に乗る：旅もいよいよ最終章。
青海省・西寧とラサ2000kmを結ぶ青蔵鉄道は、その75%が4000m以上というまさに天を翔る列車である。

註：列車は16両編成。軟臥車（一等寝台）、硬臥車（二等寝台）各2両、食堂車1両、残り8両が軟座車・硬座車、電源車1車。私たちは軟臥車（1室4名、上・下二段）使用。料金は軟臥下段810元、上段783元。

私達が乗る列車は、11:20発西寧行である。早めのラサ駅到着は、城塞のような大きな駅舎が出迎えた。

中国では、軟（一等）・硬（二等）で別々の待合室となる。ここを通過して予約の6号車へ向う。各車両の入り口には車掌が1名づつ付いており、切符の確認と座席まで案内してくれる。しかし、案内された座席では、大きなスーツケースを収納するように出来ていない。

スーツケースなどの荷物を何とか収めているうちに発車ベル、機関車牽引と繋ぎ目なしのレールで静かな出発だ。ラサの町並みがゆったりと通りすぎて行く。景色は変わり、列車は広大な台地の中を進んで行く。

遠くに山並みを見るが、列車近くは広々とした高原である。速度計は時速95kmを指しているのに、スピード感は5～60kmといったところ。次々に移り行く景色は、まさに別天地、絶景が連続する。

何もしなくてもお腹は空く。隣の食堂車へ向う。小皿の盛付けであるが、暖かい料理が次から次へ、幾皿出たか、食べきれないほど出で、1テーブル4人で200元。その他ビール5元、アイスクリーム3元、水は8元だった。

列車はどんどん高度を上げてゆき、16:50、列車の高度計は海拔4590mとなった。車窓は雪景色に変わる。その後も天候は晴れたり、曇ったり、雪になったり、それに合わせて景色も目まぐるしく変わって行く。列車は唐古拉（タングラ）山脈の中を走る。18:00青蔵鉄道の駅で最も高い唐古拉駅5068mを時速100kmで通過、5分ほどで鉄道最高地点5072mを通過した。

夕闇迫るころ、再び雪山を見る。この辺りが崑崙山脈であろうか。車窓下に、池とも川とも見える水路が随所に見える。黄河・長江の源流という。壮大な山岳風景が次から次へと展開し飽きることを知らない。

列車の旅はまだまだ続く。二日目は朝食から。1テーブル4人で80元。景色は変り、山岳風景でも山肌が真近かに見える。急勾配を円を描がいて走る。直線走行に移ると遠くに青い横線一本。近づくと水を満々と湛え、青く輝く中国最大の湖「青海湖」だ。海拔3205m、面積5694平方キロ（琵琶湖の6倍）。11時55分に西寧着、なんと24時間25分の青蔵鉄道の旅であった。



駅舎は城砦のような大きさ



美人の車掌のお出迎えを受ける



憧れの天空列車



次々とめまぐるしく変わる車窓の風景は見飽きることはない

アフリカとの出会い (26) 死が身近にある社会

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

ケニアから帰国し早や6年が経った。私がそこで見たのは人々の生活ぶりとその貧困だ。ケニアの人々の暮らしを向上させたいという思いから関わった孤児院では、仕事をしながら「どうすれば暮らしを向上させられるのか?」「何をすれば今この目の前にいる人を助けてあげられるのか?」ということばかり考えていた。

今はもう孤児院の子供達に会うことはなく、連絡もとりにあっていない。しかし、いろいろな記憶が曖昧になった今でも、何十人もいた子供達みんなのこと、子供達が抱えていた問題をいつも思い出してしまう。もちろん私がいても、いなくても問題は残る。学校のこと。家のこと。病気のこと。ほとんどはお金がない、お金を稼ぐ手段がない、低賃金過ぎるといった経済的な問題からきている。

小さな体で、大人と同じような問題を抱えて生きていた子供達。笑顔の裏に、元気に遊ぶ姿の中に、彼らの苦しみや悲しみを思うとき、「生きるということ」はそれだけでもう十分恵まれていて、十分尊いことであると私は十分に教えてもらった。私が孤児院で仕事をしていた間にも孤児院の子



供が一人病死しているし、知り合いの家族となると人はどんどん死んでいっていた。「死が身近にある」社会・・・。

私がいたナイロビに近い都市部でも、農村部でも変わらない。6年前に撮った写真を見ると、私が直接知っている人たちの、実に3人の人が亡くなっている。病死である。糖尿病、HIV、心臓病。日本で治療を受けたならば助かっていたかもしれない。たいていは治療費を家族も払えず、親戚などの寄付で死後賄われる。

先日、夫の実家の隣に住んでいた家族のお母さんが病死したと聞いた。悲しみにくれる旦那さんが電話をくれ、残された3人の子供と頑張っていくと話していた。たった数年でも、こうして人は死んでいく。

5月の下旬から3日間行われたアフリカ開発会議にアフリカの首脳陣が横浜に集まった。日本がアフリカをビジネス・投資先と考える画期的な会議になってほしいと思う。併せてアフリカの人々が安心して暮らせる経済力をつけることに力を貸してもらいたいと思う。いつか「死が身近ではないように」。



モンゴルの草原に植えた樹は?

2005年4月、前年秋開催の「ブルグッド&ヒメル」のコンサートの収益金で、現地に適したモンゴル松の苗1000本を内モンゴル・シリンホト盟西ウジュムチン地方の草原にあるブルグッドさんの山荘の近くの牧草地に植えました。

ブルグッドさんを加えた日本からの10名に、植林地である草原放牧地の管理人・バイモンドさん、馬頭琴演奏者のオノラトさんが現地から加わり、総勢12名がカチカチの凍土につるはしで穴を開け、菜ばしのようなひょろりとした樹の苗を二本ずつその穴に苗木を植えました。

湧水があり小さな川が流れる、比較的立地条件のよいこの辺りでも、元来乾燥地帯である草原での植樹は、大地が氷として水を蓄えているこの時期以外は活着しないとのこと、小雪交じりの黄砂が舞い上がる中での作業でした。

あまりにも細い苗が果たして無事に成長できるのか…。東京に住むバイモンドさんの妹・ビリカさんが現地に電話を掛けて様子を訊いて



くださったり、昨年、現地を訪れた会員の渡里氏の報告で7割くらいは無事と聞いたものの、厳しい風土に自分たちが植えた樹は我が子のようにいと

おしく、自分の目で確かめたいとの今回の内モンゴル草原の旅(6月1日～8日)でした。

苗木はすすくすくというわけには行かず、きそくえんえん氣息奄々とうにか持ちこたえているといった風情でした。それでも何本かが、「僕たちはもう大丈夫」とばかり、しっかり根を張り枝を伸ばし、モンゴル松特有の、育ったときの風格を感じさせる葉を茂らせていて感動の対面をしました。

バイモンドさんは、植林地をフェンスで囲い、井戸を掘り、完全に枯れた苗の代わりに新しい苗を植えて丁寧に管理くださり、この方がいらっしゃる限り、きっといつか美しいモンゴル松の森となることが確信できました。(田井)



2005年に植樹のメンバーたちが無事成長の苗木の前で記念撮影。右からブルグッド、バイモンド、オノラト、日高、田井、沖田

前々回は観光客をカモにしている街中の寄付金集めを紹介しましたが、今回はもぐりの両替屋を紹介しようと思います。

僕が今回の主役の両替屋と出会ったのは、コロンボの海岸線に沿ったフォート(砦)地区の南側にあるゴルフフェイスグリーンと呼ばれる公園でした。この場所は英国の植民地時代に造営され、当時は公園全体が芝生で覆われた広大な緑地で、草競馬やクリケット等を在留英国人が楽しんでいました。現在は、高波による塩害やメンテナンスの悪さから芝生が枯れてしまい部分的にゴルフフェイスブラウンの状態です。元の緑地に戻そうと芝生の植栽が進められているので近い将来には、地名に相応しく全面がグリーンになる事でしょう。

ゴルフフェイスグリーンの南端には、1864年に建設された当時の姿そのままにコロニアル様式を保持し、皇太子時代の昭和天皇や各国の著名人も宿泊しているゴルフフェイスホテルがあります。このホテルは海岸線に面しているので、ホテルの中庭はインド洋に直接につながっています。この他にもヒルトンやインド系のタージ、インターコンチネンタル、ホリディイン等の外国人観光客がよく利用する高級ホテルがこの地域に集中しています。

又、フォート(砦)地区という名前から判る様に植民地時代にはコロンボを守る為の砦が築かれており、今でもインド洋を睨んで砲台が数門残されています。旧国会議事堂等や歴史的な建造物も周囲に多いためにコロンボ市内の観光スポットの一つになっています。

この公園には、夕方になると散歩や夕涼みを楽しむ地元民、インド洋に落ちる夕日を見物に来る外国人やスリランカ国内各地からのお上りのぼさんが集まってきます。さらに、これらの人々を目当てにした屋台やお土産屋も集まってきました。お祭り騒ぎになります。ところが、日中は強烈な日差しを遮る様な木陰等が全く無いためにスリランカの人達は子供を除いては近寄りません。集まってくるのは、近くのホテルの滞り客とフォート見物の観光客、土産物屋、そしてこれらの外国人観光客を狙って一儲けしようと企む良からぬ人々です。

カラフルな風を揚げて客寄せのデモンストレーションをしている風売りやキャンディー売りに化けた両替屋・寄付金集め等がカモの到着を、首を長くして待っています。観光客がやってくると、この人達の第一声は決まって「ハロー、マイフレンド」です。これは世界中どここの観光地でも共通して「私は悪い人です、騙されたい人は寄ってきな

さい」と言っている様なもので、こういう人との丁々発止が大好きな人以外は近寄らない方が賢明です。僕は好きです。

さて、今回の両替屋もこのキーワードを口にして近寄ってきた風売りでした。この時はいつも会う両替屋がいなかったのが初対面の人です。最初は「どこの国から来た?」「日本人か?」「風を買わないか?」等の常套句から始めて、風を買う気が無いと判ると、次は僕の持っている時計やMDを売ってくれと言います。それも断ると、いよいよ声をひそめて「マネーチェンジ」と何度も繰り返します。レートを聞くと公定レートよりもかなり率が良いので話に乗ることしました。

此処からが彼との交渉という名の化かし合いです。彼はポケットからゴム輪で纏めた札束を取り出して、僕の目の前で声を挙げながら枚数を数え始めました、仮に100枚とします。そして100枚を数え終わると僕に確認しろと札束を渡して来ました。僕が数えるとやはり100枚ありました。でも、両替屋の目つきが妙に嬉しそうなのと、予め枚数を数えてゴム輪で纏めた札束を芝居がかった声で一枚一枚数えたのが怪しいと思えました。そこで念のために、今度は札束の反対側から数えてみると90枚しかありません。

これはよくあるトリックで半分に畳んだ札を札束の間に挟む手口です。この場合には畳んだ札が5枚挟んであったことになります。僕が10枚足りないと言っていると、彼は札束をもう一度ひっくり返して数え直しちゃんと100枚あるぞと主張します。後は堂々巡りで交渉決裂です、彼はシンハラ語で何か捨てて台詞を残して、少し離れた場所に移って次のカモを待つ為に風を揚げ始めました。

このトリックは、この場所でいつも会う両替屋から教えてもらった手口だったので見破る事が出来ました。これを教えてくれた両替屋は、この手口で外国人を騙す悪い両替屋がいるから注意しろと言っていたのですが、この人自身もモグリの善良な(?)両替屋だから可笑しくなります。

「ハロー、マイフレンド」と行って近づいて来る物売りにはくれぐれも気をつけて、よい旅を楽しんで下さい。でも、物売り以外でこの言葉を言って近づいて来る人の中には、付き合ってみると意外に良い人がいたりします。あまり警戒しすぎても友達を作るチャンスを失うかもしれません。

その場の状況や相手の態度を見極めて相手をするのも旅の楽しみですね。

四川大地震・体験記

わんりに「四姑娘写真だより」をお寄せくださっている大川健三さんの四川省大地震の体験記です

1)地震の当日(5月12日)

5月12日午後2時30分過ぎ、私は所用のために車を雇って四姑娘山の登山・キャンプ基地である日隆の長坪村(汶川県の震源地から標高6250mの山を越えて約60km西)から小金の町(日隆から約西50km下流)へ向かっていた。

この道は川岸の北側を削って作られた地盤が弱い急な崖が続いている道である。長坪村から町まで30km程走った所で、突然山側から石が走っている車の前にバラバラと落ちて転がり始めた。私は山腹で誰かが工事をしているのだと思い、危ないなあと窓から見上げた。しかし、山腹に工事の様子は見えず、遙か前方まで道路に大小の石が次々に転がり落ちている。

車の運転手は落石を避けて走り続けたが、子供の頭位の大きさの落石が車に直撃した。落石は運良く助手席脇の窓と後窓の間の鋼鉄製フレームに当たった。怪我をしなかったのは一瞬の差だった。私は怖くなり直ぐに運転手の横をすり抜けると運転手の後ろの座席に滑り込んだ。落石を避けられないと判断した私たちは、落石が少なそうな場所まで走ると道路脇に車を止め、道路の川側の街路樹(未だ細い頼りない木)の陰へ逃げ込んだ。

車中で揺れを感じなかったのが、状況が掴めなかったが、運転手が「地震だ!」といい始めた。

その時200m位離れた向こう岸の崖で、今まで聞いたことのない、腹に響く「ゴォーッ」という音と共に一面に土砂が崩れて来た。茶色い濃い土煙が空高く上がりこちらの川岸に迫って来る。山側からは落石の雨を受け、向こう岸からはすさまじい土煙が迫り、私たちは逃げ場を失って立ちすくんだ。が、やがて空高く上った土煙は失せ、その後は断続的に小さな土砂崩れと土埃が上がるだけになった。

山側からの落石も殆ど無くなったが、余震による落石や土砂崩れが怖く、私も運転手もその場から動けずにいた。

1時間位経って、近辺の村人が乗った単車(オートバイ)が行き来するようになった。道路におびただしく転がった落石や土砂で四輪の自動車は走れない。が、単車は落石等を避けながら近辺の集落を走り回って親戚の安否や道路の状況を確認し始めたのだ。

元々この辺りは携帯電話も通じないところで状況が掴みようがなかったが、これらの村人の話から、文川で地震が起きた事、近辺で落石のために2人亡くなった事を知った。

やがて2時間位経って、小金の町の方向からブルドーザーに先導された多数の車がやって来た。その日は小金の町で県と郷村の政府の会議が開かれていたが、地震発生で急遽会議を切上げた郷村の代表者たちが地元へ戻ろうとしていたのだ。私たちも、落石や土砂を退かしながら進むブルドーザーの後に続いて、その日の夕方に長坪村へ戻った。

長坪村の住民は殆どチベット族で、昔ながらの石積みの2階建ての家が多い所である。村の中へ入ると、家々の屋根や壁が崩れたり、2階部分が全壊して周辺に石が散乱している様子が見えて来た。停電で携帯電話は通じない。発電所は地震で壊れ、臥龍經由で供給されていた汶川県の電力も絶たれていたのだ。心配だが当地の家族(妻は丹巴、子供は成都)にも日本の親戚にも連絡不能ではどうにもならなかった。

村の人々は家から離れた場所でそこかしこに集まっていた。村の人の顔も小金の町から戻って来た村長達の顔も緊張している。私の下宿先の農家は、被害はないように見えたが、2階の屋根と壁が各所崩れ、門は扉の木枠だけを残して崩れ去っていた。しかし農家の主人と家族は無事で、1階は私が借りている部屋も含めて被害が殆どなく安堵する。やがて村全体でも死傷者が出なかった事が判ると村の人は皆、やっと気を取り直したようだった。

その日の夜から村の人は家の外で避難生活を始める事になった。たまたまこの村は四姑娘山登山やキャンプの基地だったためテント等の野営機材には事欠かず、また村の人々は普段から小麦粉、ジャガイモ、乾し肉、漬物等をストックしており、食べ物には不自由せず、生活そのものの不安は少なく、人身の被害がなかったこともあり、村人の顔にはほっとしたような表情が有った。しかし地震への恐怖を強く感じているようだった。

元来この地方は地震が少ない所だ。このように大きな地震は18世紀中期の金川戦役以後百数十年振りりで誰も経験した事がない。

その夜、村人たちは余震に怯えながらPETボトル入りの鉱泉水と朝沸かした魔法瓶のお湯を使い、カップヌードルやビスケットの類だけを食べて、眠れない夜を過ごした。私の夕食も下宿先の部屋に蓄えていたチョコレートとビスケットを齧りながら、お湯を貰って飲んだだけだった。しかし、日本で地震慣れしている私はぐっすり寝込んだ。

2)地震の翌日以降の長坪村(5月13日～14日)

翌日13日、私は明るくなった朝6時に起きた。多分通じないだろうと諦めながら携帯電話の電源を入れた。なんと通じた。早速当地の家族に電話を入れ無事を確認し合った。妻は泣きそうな声だったが、携帯電話の電池が切れ掛かっていた。長話は出来なかった。

どうにか携帯電話が通じるようになり、村人は村に1台だけの自家用発電機で携帯電話を充電始めた。携帯電話が通じるのは途切れ途切れの半日位だけだったが、震源地付近に居る親戚や友人に連絡を取ろうとしたり小金や成都へ電話して状況を聞いていた。また壊れた家からストーブや食器を持ち出して湯を沸かしたり、食事を作ったりす

るようになった。

しかし、この日も余震が治まらず政府の指示もでて、村人たちは殆ど家に入らず外で過ごした。また夜半から雨が降ったり止んだり更には地盤が緩み、時々大きな岩が落ちて来ては谷間にこだましていた。

小金県では日隆が最も震源地に近く被害も最大だった事から、この日の朝から県政府の指導者や行政担当者が訪れて村人を激励したり復旧対策を協議した。県政府の指導者は、この地方に在住している唯一の外国人であり政府機関職員でもある私に対しても激励したり便宜を図ってくれた。

14日も余震が治まらなかったが、村人の表情は大分明るくなり、特に子供達は学校が休みになり生活の不便もあまり感じないせいか普段よりも多くの笑顔が見えるほどである。

テレビも家から持ち出して自家用発電機に繋ぎ、ニュースも見れるようになった。しかし燃料の油が販売中止で長時間は見られない。

夕方から時々晴れ間が広がるようになり、道路の落石が止まれば翌日は安全に道を通れそうな期待を持たせてくれた。更に、丹巴を経由して成都へ出るルート(約12時間)が通れるようになったとの情報も入り、今後の物資確保についても安堵できるようになる。

3) 小金の町 (5月15日)

15日になって晴れた。私は日隆の長坪村から約西50km下流に在る小金の町(県政府の所在地)に出ることにした。ガソリンが販売停止になり小金へ行く乗り合いタクシーは少なく、料金は普段の2倍だった。

小金の町までの50kmの間で最も落石や土砂崩れの跡が酷かったのは、地震の日に私が乗った車が落石を受けた辺りである。今更ながら間の悪さと運の良さの両方を感じた。

小金の町に近づくにつれて落石や土砂崩れの跡は減り、鉄筋コンクリート作りの家が多い小金の町は殆ど被害を受けていない。しかし安全を重視する政府の指導に従って多くの住民が家の外でテント生活していた。宿屋は泊めて

くれず、仕方なく私は友人の家に転がり込んだ。

数日ぶりに電気が有り、電話回線も使える生活環境(国際通話は出来ませんが)に戻れた有り難さをしみじみ感じた。直ちにE-mailチェックを始め、気になっていた日本の親戚へもメールで無事を知らせる事が出来た。

小金の町は地震後、成都からの物資の供給が止まった事や余震を恐れ、食堂や商店などの半数が閉まっていたが、青果市場にある馴染みの食堂は開いていた。久しぶりに顔を見せた私を笑顔で迎えてくれ、久しぶりに旨い飯を食べられた。人生何がとって、やはり食べることの楽しさと大切さを改めて感じた。

読者の方々へのお願い

大川健三

汶川県南部の震源地とその周辺地域は四姑娘山と成都の間を往来する時にいつも見ている場所で、昼食に立ち寄った事も度々あります。そこかしこの風景が眼に浮かび、今はどうなっているのだろうかと思いを巡らせてしまいます。亡くなられた方々のご冥福と、幸い生き残る事が出来た方々の早い回復と奮起を、心から祈っています。

一方、震源地の被害に比べれば、四姑娘山西側の山奥にある日隆の被害は遥かに小さく感じられ、死傷者もでませんでした。しかし、山奥のチベット族の、昔ながらの石積みの家は地震に弱く家屋への被害は甚大でした、人々は余震を怖れて壊れた家の整理もできず、家の外でテント生活を続けています。命が助かった事を喜び合っていますが、一方で家を修理するための資金をどうするか苦しんでおり、政府はじめ多くの援助を待っています。

どうか彼らの事も忘れずに見守って頂けるようお願い申し上げます。



乱雑に置かれた物や崩れた石が地震の後を物語る村の様子
(5月25日)



避難生活しているテントや急場しのぎの小屋で勉強する子供達
(5月25日)

2006年、四川省一人旅で訪れた四川大地震震源地に至近の汶川、映秀は、旅の忘れられない思い出の場所となりました。今回の大地震で亡くなった方たちを悼み、この旅で出会った人々が無事であることをお祈りいたします。

翌日の朝、再びバスターミナルへ向かった。

私はいったい何をやっているのか。元々ビサが出るまでの時間つぶしだった筈の旅がまだ終わっていない。ビサは金曜日には発給されている筈だったが、松藩から成都に戻ったのは土曜日で、今日は既に月曜日だ。本当なら今日は公安にビサを受け取りに行くつもりだったのだ。あれから二日経って、龍の石がまだ売れずにあの休憩所にある保障もない。だがもうこの事にケリが着くまで、成都を離れる事ができない気持ちになっていた。自分で考えてもつくづく馬鹿である。こんな馬鹿な事のためにあえて時間を浪費できるというのも自由な一人旅ならではの。

今日は映秀までのチケットを買った。25元。もうすでに何度も通っているこの道には、親しみさえ感じられる。休憩所探しも二回目ともなれば難なく見つけられた。もう昨日の二の舞は踏まない。休憩所のそばまで来たところで私は席を立ち、じりじりとバスの降車口のある前方に移動した。絶対今日中に決着をつけてやる。休憩所の前に着いた瞬間に大声で叫んだ。

「我要下車～!!!」

車掌と運転手はビックリしたように私を見ると「まだ映秀じゃない!ここで降りても何も無いんだぞ!」と慌てていたが、構わずバスを止めさせて下車することができた。やったあ～!! 去って行くバスの窓からは、乗客達が訝しげに私を見下ろしていた。みんなが不審に思うのも無理は無い。私の下りた場所は片側は山、片側は崖、街からも遠く離れた本当に何も無い場所なのだ。あの休憩所を除けば。

車がゴンゴン走り抜ける道のガードレールに張り付くように歩いて100メートルほど戻ると、苦労を重ねてやっと戻ってこれた休憩所だ。街から遠く離れた炎天下の道路からフラリと歩いて入ってきた女を見て、休憩所の人達がギョツとしたように私を見つめていた。が、私はそれどころでは無かった。

あの龍の石はまだ売れずにここにあるのか? もし無かったらこの二日間の苦労が水の泡だ。緊張のあまりすぐには確かめる事ができず、先ずトイレに入って心を落ち着けた。トイレの使用料は5角。約7円。トイレから出て恐る恐る屋台の方に向かうと、土産物の中に石が一つだけゴロンと転がっているのが遠くからも見えた。やった～!!! まだ有る～!! 小走りで駆け寄り石を取り上げた。

「!？」

私の取り上げた石に浮き出ている模様は・・・鹿だった。
「……………」

予想外の展開に思わず固まってしまう私なのだった。
「買う？」

石を握ったまま見つめている私を、店の女の子が奇妙な物を見るような目で見つめながら声をかけてきた。

「いくら？」

「80元」(ゲッ…!) 「高いね」

「これは珍しい物なのよ! 自然にこんな模様が浮き出してる石なんだもの。これ一つしか無い物よ!」

思わず苦笑してしまった。

「龍は無いの？」

女の子は一瞬言葉に詰まったが、

「あなた買うの? 買うんだったら探してあげてもいいわ」と言うと、照れくさそうな顔をして店の奥のダンボールから石がゴロゴロ入った袋を取り出し、龍の模様が入った石を探し出すと私に渡した。

それはまさしくあの時に私が見た龍の石だ。うわ～! 有ったんだ～!! 既にこの石が本物だろうと偽物だろうと構わないくらいの愛着が湧いていた。

「これ20元だよ。買うよ。」

私は先ほどの彼女の言葉を無視して言った。

彼女はまた照れくさそうな顔をする。「いいわ」と頷いた。その値段でも十分すぎるほどの利益があるに違いない。石を受け取るとそっとズボンのポケットに入れた。手に入れられた喜びと安堵で力が抜けてしまった。石さえ手に入れてしまえばもう用事は無いのだが、二日がかりの苦労の末にやっとの思いで辿り着いた場所だ。すぐに帰ってしまうのでは勿体無い。休憩所の生活にも興味がわいたのでしばらくここにいる事にした。

「あんた、どこからやって来たの？」

休憩所のおばさんが話しかけてくる。

こんな場所に外国人の女が歩いてやって来たのだから、不思議に思うのも無理は無い。しかし石を買うために、成都からバスでやって来たと言うのはさすがに少し恥ずかしく、言葉が上手く話せないふりをして誤魔化してしまった。

おばさんも深くは詮索せず、

「疲れてるでしょ? ちょっと休憩していきなさいよ」と土産物屋台の脇にあった椅子を勧めてくれた。

その時、大型の観光バスが2台続けて休憩所に入ってきた。途端に今までのんびりしていた休憩所の雰囲気が一変、鉄火場が変わった。男の人達はいっせいにデッキブラシとホースを担いで走り出るとバスの洗車を始め、女の人達はどっとバスを降りてくる乗客の群れを相手にトイレ使用料の徴収、ジュースやアイスクリーム、土産物の販売とてんでこ舞だ。バスの停車時間は短い、その間は猫の手も借りたいほど忙しい。そしてバスが行ってしまうと、時間の流れもとたんにゆったりした速度に戻るのだ。

その変わりようがあまりに激しくて可笑しかった。

父、母、娘、息子の4人家族でやっているらしいこの休憩所はなかなか良い商売になっているようだった。しばらく見ていると、かなりの頻度で観光バスはやってくるのだ。5角のトイレ使用料は、停車したバスのほとんどの乗客が利用する事を考えれば、一日の徴収金額は結構なものになるに違いない。街で通常1.5元程度で売られているペットボトルの水はここでは5元。5角程度のアイスが2元。それでもバスが着く度に飛ぶように売れていく。対応が追いつかないほどだった。私から見ればチャチな土産物も、10個単位で買って行く中国人観光客が少なくない。きっと旅のみやげだと知人に配るためなのだろう。

土産物屋台の横に座っていた私を店員だと思い込み、「これいくら!?」「ちょっと負けなさいよ!」と声をかけてくる観光客もいた。土産物の値段は簡単で10元と20元の物があるだけだった。見ていたら直ぐにおぼえてしまい、私にもわか店員に早変わりだ。店の女の子がそんな私をみて苦笑する。

お客が引けた合間に女の子やお母さんと話をした。「儲かっているね」と言うと、女の子はお金を数えながら「まあね」と笑った。なかなかやり手そう。気が強そうなキリッとした美人だ。お母さんに「娘さんは美人だねえ」というと自慢げに頷いた。

この場所の名前を聞くと『百花』という地名だと教えてくれた。持っていた地図で確かめると白花と書いてある。中国語の発音ではどちらも「バイホア」と読むのだが、どちらが正しいのだろう。壁に貼ってあったこの土地の連絡表のようなチラシにも百花と印刷されていたので、おそらく地図が間違っているのではと思ったが確かめ損なってしまった。いずれにしても、この旅での忘れられない地名になる事には違いない。

お母さんがキュウリを剥いて、食べなさいと勧めてくれた。「どうやって成都に帰るつもり?」と心配してくれるが、私は帰りの方法については全く問題にしていなかった。この休憩所にはひっきりなしに成都行きの観光バスが立ち寄るのだ。空席のあるバスにお金を払って乗せてもらえば、問題なく安全に帰る事ができるはずだ。

休憩所に来てから二時間近く経とうとしていた。休憩所の人とも仲良くなって立ち去り難いが、暗くなる前に成都に帰る為にはそろそろ戻ったほうが良さそうだった。ちょうど成都行きの観光バスが休憩所に停車し、運転手が売店の中に入ってきた。店の人達と親しいらしく、店のお母さんが運転手にもキュウリを剥いて差し出した。

「あなたのバスに空席はある?」話しかけてみると運転手は首を横に振ったが、お母さんが「この子、日本人なんだけど帰る車がないのよ。乗せて行ってやってくれない?」と口添えしてくれると、運転手のおじさんも「そういうことなら任せときな!」と胸を叩いた。四川省の中国人って優しいなあ。この旅が始まってから何度も感じたこ

の言葉が胸の中に浮かんだ。

一服した運転手が立ち上がり、私は休憩所の人に別れを惜しんでバスに乗り込んだ。客席は空いていなかった。私の席は運転手の脇の車掌席だ。車高が高い大型観光バスの最前列は最高に気持ちいい。私は凱旋将軍の気分だった。ちょっと手間取りはしたが宝探しは大成功だ。時間とお金を浪費し、疲れもしたが、普通に買っていたら味わえなかったような経験と思い出が残った。私流の旅ではそれが重要な事なのだ。似非物の龍の石はこの旅の戦利品だ。嬉しさに思わず石に頬擦りした。何度もズボンのポケットを撫で、石がちゃんと入っている事を確かめながら帰った。

それにしても、このバスの運転はものすごい。片側が崖の急カーブが続く道をすごいスピードで飛ばし、少しでも遅い車が前方にしようものならカーブの前だろうと、トンネルの中だろうと派手にクラクションを鳴らしながらガンガン追い越していく。運転席の脇に座っていた私は生きた心地がせず、思わず神様に祈ってしまった。無事に成都まで帰れますように〜!!ひ〜!(涙)

運転手のおじさんはシャツをはだけた腹出しスタイルで、バスの運転手というよりは工事現場のダンプの運転手だ。私が内心神様にお祈りしているとも知らず、時々私の方を見ては「俺って運転上手いだろう?」というように得意げな顔をする。きっとこのおじさんは「公共安全」とか「人命を預かる責任感」についてなど考えた事もないんだろう。が、一応腕の方は確からしく、かなりきわどい運転ながらもバスは無事に成都のバスターミナルに到着した。

生きたまま成都に帰れたことを神様に感謝しつつバスを飛び降りると、運転手に「いくら払えば良いの?」と尋ねたが、彼はそれには答えず何やら奥歯に物の挟ったような物言いでゴニョゴニョ言っている。何度も聞き返しているうちに、私の手を握ってきて、どうやら「今晚俺と付き合ってくれ」と言っているらしい。

ちょっと〜!おじさん! たかがちょいとバスに乗せたただけで、それはあつかましいんじゃないの〜!? まったく、今まで親切な人ばかり出会っていたので安心していただけだが油断大敵だ。私は言葉がわからないふりをして、映秀までと同じバス料金の25元を無理やりおじさんの手に握らせると、手を振ってバスターミナルを後にした。

成都の宿に戻ると大事な石を取り出し、改めて眺めてみる。見れば見るほど人工的に細工された物なのが見え見えの石だった。何故これを自然にできた模様かもしれないなどと思ってしまったのだろう。しかし私にとっては宝物だ。失くしてしまうのが怖くてベッド脇の貴重品入れの中に大事にしまって鍵をかけた。

これでもう思い残す事は無い。明日は公安にビサを受け取りに行つて、成都を旅立とう。

とつても満足な夜だった・・・。

▶ 四川大地震について

5月12日午後2時16分、中国は未曾有の大地震にみまわれた。四川省の汶川市を震源地とするマグニチュード8の「四川大地震」であった。中国のほとんどの地域のみならず台湾でも大きな揺れが感じられたほどの凄い地震であった。幸いにして東北部の大連周辺では全然感じることはなかったが、北京でも上海でもその地震を感じたと地元新聞には書かれていた。

中国政府は、死者は4万75人、負傷者は24万7645人、行方不明者は3万2361人と発表した(5月20日)。最終的な死者は7万人を超える見通しと、新華社が伝えた。また同社によると、全国で約536万戸の建物が倒壊し、約2142万戸が一部損壊、1234万人を超える人が避難していると伝えている。

新聞やテレビでは、毎日多くの人々が奇跡的に生還を続けていると報道していたが、その中でも次のような記事が目をつけた。

**「愛したことを忘れないで」
—男児守り死亡の母、携帯に遺書—**

「お母さんのことを忘れないで」。身をていして赤ちゃんを守り、冷たくなった母親の手にあった携帯電話には、最後の力を振り絞った1行の遺書が残されていた。このように20日の新華社通信が報じた。

この母親は最大被災地の一つ、四川省北川県綿陽市で、地震発生翌日の13日、四つんばいになった格好で遺体が発見された。遺体は倒壊した建物に圧迫されており、救援隊は立ち去りかけたが、何となく気になり、ふと遺体の下のすき間に手を差し入れたところ、温かいものに手が触れた。「赤ちゃんが生きている！」。

救援隊員が叫び、救出作業が再開。生後3～4ヶ月とみられる無傷の男の赤ちゃんが毛布にくるまれて発見された。救援隊員が母親の体を調べると手に握られた携帯電話の画面に、1行のメッセージが残っていた。「赤ちゃん、もし生き延びてくれているのなら、私があなたを愛していたことを絶対わすれないで・・・」。子を思う母親の愛の深さに、救援隊員も思わず涙を落したという。


地震が発生してから1週間後の19日から3日間は「全国哀悼日」として国民全員が喪に服することとなり、この3日間北京オリンピックの聖火リレーが中止され、公共関連機関は半旗を掲げ、娯楽活動を停止した。私たちの学校でも19日には地震が発生した午後2時16分には3分間の黙とうをささげた。この時間には全国で自動車や列車など警笛を鳴らしたと伝えられている。

地震が発生してから連日どのテレビを見ても娯楽番組は中止され、地震に関するニュースばかりで、5月中はこの状態がずっと続いた。その徹底さには驚かされた。


また全国的な募金活動が行われ、当校でも教職員・学生が一丸となってその活動に協力した。その様子を地元のテレビ局が取材に訪れ、私も記者のインタビューを受けたりした。

私が教えているクラスの学生たちに、今回の地震についてどう感じられたか先日(5月22日)文章を書いてもらった。彼らは日本語を勉強してまだ一年半位しか経っていないので十分意を尽くしたとは言い難いが、どの文章も真摯な心と国を思う中国人らしさを感じることできるのではないかと思われる。そのうちの何人かの学生の作文(原文)を紹介したい。




 地震が起こった時間は5月12日でした。地震の情景はとても大変だった。当日、M8クラスの地震がありました。今、6万人ぐらい死んでしまいました。30万人ぐらいひどい怪我をしました。私にとって、とても悲しかったです。今、震災の被害状況の調査が進むにつれて、被害の深刻さが次第に明らかになりました。建物は全部壊されてしまいました。住宅問題についても困りました。救援物資を提供した人は大勢いますね。私たちにとって、今度もいい勉強になりました。


(陳債・女)


 2008年5月12日14時28分、中国の四川省で大地震が起こってしまいました。今度の地震は8.0級ですから、世界の人々をおどろかせています。今度の地震は中国にとって本当に厳しい挑戦です。四川省のほとんどの建物は壊れてしまいました。特に、学校です。大勢の学生は倒れた建物の中に閉じ込められています。たくさんの子供はかわいそうな孤児になりました。軍隊がいるから本当に助かりました。一人、二人、三人、ひとりふたり救われました。軍隊は救いを求めている声を聞くと、すぐ手を尽くして救い始めます。彼らのおかげで、もっと多い人はこの世界に生きて行きます。今まで6万7千は私たちを離れました。この後、もっと大勢の人は私たちを離れるかもしれません。私たちは被災地区の人たちに一心に祈ります。今度の地震によって、私は何か分かりました。それはもっと命を愛惜していきます。よく勉強して行きます。がんばりましょう！

(王芳・女)


 2008年5月12日午後2時28分に四川で大地震が起こりました。M8クラスの地震です。この地震で多くの人の家とか親戚がなくなりました。死んだ人が今6万人を超えました。とてもひどい災難です。被害者を助けるために私の学校も募金をしました。国は軍隊を派遣して、被害地域へ行って被害者を助けます。被災者は次々に助けられて、私の気持ちもよくなりました。人を助けるうちに、余震が絶え間なく起こりました。でも軍隊とか医者とかだれでも逃げませんでした。それは感心されています。私は何もやってあげられません。ただ、被害者のために心から祈ることができます。まもなく新しい四川が建てられることを信じています。

(湯婷・女)

 地震が起こった当日(2008年5月12日)は普通の日で、何の異常もなくみんなは仕事をして、勉強して、生活して、14時28分の時、急に地震が起こりました。大勢の人が死んだ。大勢の子は親が亡くなりました。大勢の親は自分の子がなくなってしまった。翌日、私はテレビでそれを知りました。私の心は痛い。四川の人民がかわいそうな気がします。私は電話でそこへ応募しました。50元だけです。同時に世界各地からの募金、救援軍隊も大勢です。大勢の人がその災難から逃れました。中国人、がんばれ。四川人ががんばれ。もう一回家を建てろ。
(李秀峰・男)

 わが国で5月12日午後2時28分に大きな地震が起こりました。ひどい被害を受けた地区は四川省在をはじめ、広州、重慶などです。今度の地震はだいたい山に囲まれた山村で起こりました。そのうちで最も深刻な県は汶川県です。最新統計によると、死者は2万人を超えているそうです。今度の地震はわが国の多方面に大きな影響をもたらしました。経済の面に深刻な損失がありました。幸い、中国人は愛をもって、被害者に募金をしたおかげで、その困難さを減っています。多くの人々の命を守りました。この地震は大きな災害を与えたといっても、我々はそれに倒れられません。勇気を持って戦います。わが国の経済などの面で、さっそく回復できて、私たちの生活も前よりさらによく改善できていると思っています。私たちは大地震に勝ちました。私たちにとって怖いことはない

でしょう。中国、がんばれ。中国人、ファイト。(劉敏華・女)

 2008年5月12日に四川の汶川県で8.0級の地震が起こりました。今までに死んだ人は63、831人位です。この地震は私を悲しませました。学校は地震救済のために募金活動をしました。今度の地震は私にとって心から何か人生の意義が分かりました。よく毎日を通し、成功にはよく勉強しなければなりません。金持ちまでの日に社会のために有意義なことをします。私は私たちの国を愛します。中国頑張れ!この言葉は北京の天安門の広場で老人から子供まで皆がずっと叫んでいました。テレビによって広く紹介されました。その日は被災者のために記念すべき日となりました。5月19日～21日、全国哀悼日。
(江道余・男)



これらの学生が一生懸命書いた文章から何かを感じ取ってもらえればと思う。私自身今回の地震とそれを通して見ることでできた中国人の考えに、これまで持っていた固定観念を変えざるをえないような面が多々あることに気がついた。

私の大連での滞在日時もあとわずかになってきた。私の「大連便り」は間もなく終了します。これまで読まれてきた皆さんからのご感想やご意見など「わんりい」編集部宛にお寄せください。

中国を読む(53)

憲法なんて知らないよ—というキミのための「日本の憲法」

池澤夏樹著
(ホーム社)



Aspiring sincerely to an international peace based on justice and order, the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat or use of force as means of settling international disputes.

有名な文章ですが、お分かりでしょうか。

まずは池澤夏樹氏の訳。

「この世界ぜんたいに正義と秩序をもとにした平和がもたらされることを心から願って、われわれ日本人は、国には戦争をする権利があるという考えを永遠に否定する。国との間の争いを武力による脅しや武力攻撃によって解決することは認めない。」

次に一般的な訳。

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」

日本国憲法の第9条1項だ。

今年4月17日に、名古屋高裁が、航空自衛隊が首都バグダッドに多国籍軍を空輸していることについて「憲法9条1項に違反する活動を含んでいる」との判断を示した、というニュースを見て、憲法の威力を少し感じた。この判決は実際には国の勝訴であり、具体的にどうというわけではないけれど、憲法に9条があることで「いけないことかもしれない」くらいの認識は私たちに伝わるわけだ。

中国四川省へ、テントを運びたいという善意も、それを運ぶものが自衛隊の航空機となると拒否される(確かに、自衛隊の航空機で運ぶ必要性はあまり感じられないけれど)。

なんとなく、中国のなかのどのくらいの割合の人がこの条文を知っているのかしら、と思う。正直、条文自体は硬い表現で、いまいちピンとこない(もちろん、英文はまったく理解不能)。けれど池澤夏樹氏の訳文は壮大だ。私たち日本人は世界全体に平和がもたらされることを心から願っていると、少なくとも国の基本方針である憲法に謳っているわけだ。なるほど、いい憲法じゃないか(多少時代に合わない部分が出てきたとしても)。

(真中智子)

暖かいご支援をお願いします。

四川大地震・チャリティコンサート



四川の復興を祈る、中国民族音楽の夕べ

中国民族音楽演奏の精鋭たちが祈りをこめて演奏くださる、美しくも心うつ天女たちの楽曲の数々。収益金は全て四川大地震への義援金として贈ります。

出演：銭騰浩(笙) 姜小青(古箏) 馬平(打楽器/中国木琴) 趙鳳英(歌)

- 2008年7月24日(木) 19:00～
- 於：町田市民フォーラム・3Fホール(188席)
- 参加費：2,500円
- 問合せ：042-734-5100 'わんりい'
e-mail: wanli@jcom.home.ne.jp
- 主催：'わんりい'
- 後援：中国大使館・文化部 / (財)日中友好会館

予定曲：瑶族舞曲／青海波／豊収鑼鼓／水庫引来金鳳凰／草原騎兵陽関三疊／千の風になって／月の涙／ウイリアム・テル序曲／家路(新世界より)／花好月圓／康定情歌／茉莉花／芭蕉布 他

【皆様の多くの、暖かいご支援を四姑娘山登山基地・日隆へ】

6月初旬、四川省四姑娘山自然保護区*管理局特別顧問であり、またプロのカメラマンとして活躍の大川健三氏が一週間ほど日本に帰国し、そのお忙しい日程の中、'わんりい'事務局を訪ねてこられ、四姑娘山登山基地として知られている日隆の地震被害状況を報告くださいました。

日隆は、2005年夏以来回を重ねて'わんりい'メンバーたちが大川氏の案内で四姑娘山・自然保護区を訪れた折に宿泊した場所であり、四川大地震の震源地と山一つ隔てた近距離(西方60km)であることから、地震発生(5月12日)当初から安否が心配されていました。5月15日になってやっとインターネットが繋がるようになり、大川氏の無事が確認され、日隆での地震被害状況を撮影した写真が送られてきました('わんりい'6月号掲載)。

大川氏の話では、日隆では幸い死傷者は出ませんでした。古来からのチベット族建築方法で石と漆喰で築いた家は揺れにもろく、特に四姑娘山保護区に近い長坪村では、地盤が弱いこともあり約200戸の内70%で2階部分が落ちたり壁が壊れたりなど家屋への被害が甚大だったとのこと(日隆全体では総計400戸余りに被害があった)。当地はもともと半農半牧で生計を立てているチベット族の集落で、日常的に日中は野外の仕事に携わるため地震発生の折は家の中には人がいなかったことが幸いし、死傷者が出なかった大きな理由とのこと。

高山に囲まれた日隆での現金収入は四姑娘山保護区を訪れる観光客に頼ってきました。観光客離れは確実と予測できます。目下のところは余震が続いており政府からの安全宣言が出ていないため1ヵ月以上経った現在もテント生活を余儀なくされています。家に戻れるようになれば早速に家の補修に掛からねばなりません。

しかし、未曾有の地震被害を受けた地域は多く、四姑娘山の懷に抱か



義援金受付：

郵便振替口座 00180-5-134011 口座名:わんりい
(通信欄に、四川地震義援金とお書きください。尚、義援金の額の多寡は問いません。小額カンパ歓迎です)

れたような山奥の地域にまで公的支援の手が差し伸べられるまでには時間を要し、観光に携わっての現金収入が全く途絶えた現在、その資金の調達は厳しいものがあります。大川氏との話し合いで、7月24日のチャリティコンサートの収益金は大川氏に委託し、家屋の修理用セメント購入費として使用していただくことになりました。

小さな市民サークルである'わんりい'が出来る支援はいかほどのものではありません。けれども皆で手を繋げば大きな支援の力となることができます。コンサートの収益金に併せて少しでも多くの支援ができればと願って義援金受付の窓口を開きました。日隆は近年、日本人が多く訪れる地域でもあります。目に見える義援金の贈り先へ向けてご一緒に力を合わせて頂きますよう祈っています。(田井)

*2006年、隣接のパンダ繁殖基地・臥龍と共にユネスコ世界自然遺産として指定。4座からなる名峰・四姑娘山、色とりどりの高山植物と幻の花・青いケシで知られ、多くの日本人が訪れている。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に'わんりい'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

【7月の定例会&おたより発送予定日】

- 定例会：7月15日(火) 13:30～ 田井宅
- 8月のおたより発送はありません。9月に又お目に掛かりましょう。お元気でよい夏を過ごされますようにと祈っています。